

春燈

2 月号

February 2010



主宰の句

安立公彦

高咲ける皇帝ダリア神の留守

漱石忌全集いまに古ぶなし

短日や書肆の灯明り背に受けて

わが影の壁にふくるる冬至かな

潮汐の逆白波や去年今年



燈下集



○ 林 紀 夫

奥山の踏分け径や冬紅葉
短日や影を背負うて下山道
小春日や昔へつなぐ糸電話
すぐもれる内緒話や小六月
積置きの本積直し年用意

○ 割 田 容 子

初時雨色を束ねし京野菜
枯菊焚き寧けき日々を手繰寄す
煮凝や頑張らなくともよき齡
今さらに母の恩愛葛湯吹く
レコードの針の沈むや憂国忌

○ 小 泉 貴 弘

生きざまは人さまさまや菊の園
白菊やをどこ死んでも伸びる髭
雀色どき蛤となる雀かな
文楽の木偶のおよよと泣く夜長
火恋し夜汽車の窓の己が影

○ 岩 永 は る み

秋冷や古書の香残る小風呂敷
糺の森の一本道や蔦紅葉
神域の庭はばからず秋の蛇
横笛の夜気を統べたり月を待つ
隣席に佳人を得たる良夜かな

○ 戸 辺 信 重

高々と木守柿照る孤独かな

一瞬やドアの取つ手に冬来たる

余命ふと思ひてゐたる年の暮

定年後徐々に減りゆく賀状かな

打ちつけて仲間気さくや日向ぼこ

○ 中 野 さ き 江

喉とほる水の硬さや今朝の冬

ひとすぢの香のゆらぎや寒夜の計

あだし野の身を吹き抜くる寒さかな

ためらひを隠せぬ人や帰り花

ぶつきらほうの職人かたぎ足袋の穴

○ 成 田 な な 女

冬ざれやすつくと佇ちし大師像

白梅や佐布里が池の風固し

朝時雨露地石濡らし行きにけり

冬の蝶夢幻の如消ゆる

逆縁に泣きたる年を惜しみけり

○ 栗 原 完 爾

冬蝶の色ともならず落ちにけり

大寺の背山むらさき片しぐれ

かけはぎ屋の灯ともす京の時雨かな

神木の洞ふかぶかと冬の蝶

神の留守鼻つけて見るご祭文

○ 松 本 俊 介

銀杏落葉二枚賜る見舞かな

やや馴れし減塩食や初しぐれ

けふも来る雀に芝の枯れ進む

同郷の誰なつかし都鳥

酉の市はぐれぬ腕を組みにけり

○ 堀 内 五 齡

山男送るにおでん囲みけり

老犬の尻尾甘ゆる小春かな

思ひ出し笑ひふくらむ日向ぼこ

枯野来て眼鏡くもらす屋台かな

マスクして男一語を惜しみけり

○ 小菅礼子

立冬の手をついて立つ自愛かな

健康診断年齢相応や萩括る

そろそろ鳥の目に入る頃や実南天

夕ざぐる風が包みし冬はじめ

「わが妻へ」てふ亡父の日記や小春日や

○ 生田高子

短日や王子稲荷の狐穴

短日の鳥が雀る棕櫚の皮

もう少し海見てぬたき小春かな

しぐるるや置けばすぐ沸く魔法瓶

夕影やいつもの場所に焼芋屋

○ 森下賢一

遊弋や小名木川いま鱷のもの

遅れとり戻す熱燗勇の忌

羽子板市背中に感じ居酒屋へ

猫の爪切りそろへるも年用意

漱石忌いつもまる見え猫の尻

○ 野崎昭子

喧噪の人語が散らす銀杏落葉

秋逝くや彫深くなる人の顔

境内に雀群れをり神の留守

山眠る夕日に肩をとがらせて

冬霧の果は黄泉やも引き返す

○ 本多遊方

野良猫を飼ふと決めたる小春かな

人の出入り猫の出入りや日短か

嫁姑仲良く落葉掃きにけり

年回の供養を済ませ年忘

古曆梵鐘重く下りけり

○ 岡野イネ子

枝折戸を開け山茶花に迎へられ

牝狐の尾の長きこと太きこと

昨日今日紅葉且つ散る無縁坂

顔見世や京都南座雨催ひ

湯豆腐やひとりぼつちのちりれんげ

○ 大英博物館門前の焼栗屋

とらふぐのもの言ひたげな目なりけり

電話帳の重きにあへぎちやんちやんこ

上加茂や戸毎ににはふ酢茎漬

業平の墓をねむらせ山眠る

○ 武田 巨子

牡丹焚火母の情のいまさら

辞世の句はやばや案じとろろ汁

べじー蒲団の仕立上りを干しにけり

産み月の千両紅を深めけり

里神楽迎へて送りふるさとや

○ 諸岡 孝子

あたら夜や手焙りの火をいつくしみ

佗助の無垢の日数や炉を開く

土大根立てかけてあり躰り口

刎ねられてなほ寒鯉のしばたたき

すれ違ふ車の顔も師走かな

○ 枯蠅螂なほも殺陣師の面構へ

神留守の天を騒がす尾長どち

鳩潜き水面の空のゑくばかな

トレモロを奏せせせらぎ小六月

雷門の神の禪に冬日濃し

○ 宮崎 裕子

持ち歩く三文判や神の留守

家無きもあるも小春のベンチかな

わびさびは猫の名前や木の実降る

けふの罪風に飛ばすや神の留守

蛇穴に解せぬ中国簡体字

○ 平野 加代子

七七忌梅檀の実の降りにふる

くつきりと灯る追慕や冬夕焼

後の更衣仕覆の紐を改むる

湯気立てて舌鋒かるくかはしけり

主婦休業と決め海鼠腸すすりゐる

当月集

安立 公彦選



○ 冬桜三井晩鐘の音澄めり

鐘冴ゆる愛染堂の丹の柱

翁堂の藁屋根伝ふしぐれかな

罅走る翁の墓碑や石路の花

経蔵の扉冷たき日暮かな

○ 清水美子

○ 北岸 邸子

禰宜と巫女の話弾めり石路日和

独り居の刻ゆつたりと帰り花

色褪せても余生大事よ薬喰

道問はれ道連れとなる小春かな

日記買ふただそれだけに一と日了ふ

○ 棗 怜子

退院の帰路真つ直ぐに薬喰

アカペラの黒人霊歌冬の月

久に着るセーター真つ赤退院す

聞き上手に口すべらせて温め酒

寒波にもめげぬ生足女子高生

○ 莊 司 正 代

空蟬や地にさらさらと風過ぐる

ほほづきに紅さしそむる小さき幸

石囲む冬草ひとと蘆花の庭

愛情の日をまなうらに曼珠沙華

生ありて死ありて空に合歡の花

○ 都丸美陽子

落葉踏む母子にありし言葉の間

いつせいに絵馬のいなく北風

花八手出さずしまひの手紙かな

朽野や土に還りし道祖神

眠る山浮雲細く流れけり

春燈の句

安立 公彦選



茶の花や日暮の早きペンの先

東京 渡辺 若菜

空の青水に映して破れ蓮

日当りて障子の棧のあたたかし
抜けるよな空へ耀ふ冬ざくら

岐阜 瀬戸 峰子

小春日や姉の手織の草木染

おぎろなき日を賜はりて冬ざくら
淡き日を捉へ見栄切る冬ざくら

呼んでみるだけの名前や冬紅葉

東京 川崎真樹子

妬まれぬほどの幸せ日向ぼこ

懸命に今を咲きたる冬ざくら
うすき膝正して老の初鏡

東京 安藤 利恵

帰り花仏の花にほらと言ふ

冬木の芽光待める明日のあり

つもる落葉蹴つて気の済むほどのこと

下萌を歩めば弾むいのちかな
落葉焚く出さずじまひの文ともに

霜のこゑ吾にふたつの膝小僧

神奈川 河本由紀子

お取越夫に貸したる女数珠

減りしもの種々なかでも野菊かな
釣瓶落しご飯だようと母の声

神奈川 葦原 葭切

霜降や三文判で済む話

色変へぬ松の見せある底力

野外ライブの轟音枯葉浮かれけり

花石路と日差しを分かつ道祖神
落葉舞ふあるかなしかの風の中

自分史を臉につづる霜夜かな

千葉 海村 禮子

里山に点描のごと鳥瓜

真向ひに大いなる冬の入日かな

宮崎 前原早智子

道元の山ふとところに石路咲けり
ただきに夕日あつめし木守柚子

余言

安立公彦

ように未来を見つめるようなことは書けない。日々のあり様を忠実に書く。日記は脳トレにも効用がある。

この句、「なにを恃や」と言いつつも日記帳を買うところに、一句の本意があり、作者の姿も映し出される。その日記は豊かな一年を収録してゆくことだろう。

命ありて冬の銀河をくぐりけり

小宮 淳子

新しき日記まぶしくありにけり

山内 四郎

いかにも初日記にふさわしい句だ。何よりも気持の若々しさが一句に充ちている。初日記を眩しと見る思いの中には、未知の時間と空間の織りなす三百六十五日の作者の足跡を、いまだ新鮮なものとして捉える感性がある。

〈初日記一齟齬すでにありにけり 敦〉の句には、先生の風貌が消し難く背景となつていますが、掲出の句には、作者の豊かな「文学」が息づいている。

寅歳へなにを恃むや日記買ふ

小島 禾汀

歳末、作者は新しい日記を買いながらも、「なにを恃むや」と一瞬逡巡する。私も日記をつけている。しかし若い時の

まさに「命ありて」だ。作者は大病を良く剋復し、再び元気な姿を見せている。病気にも連鎖のようなものがあるのか。近事、身近な人の相次ぐ入院を聞く。

病根の芽生えはどういう人にも一様にあるもの。それが表に出るか出ないかは、その人を形造る細胞の微妙な差にあるのではなからうか。俳句がその微妙な差を助ける精神的な一助になることを信じたい。「冬の銀河を」「くぐりけり」が一句を真摯に支えている。

老いらくの衝動買ひや秋闌くる

陳 妹蓉

「老いらくの恋」というフレーズがジャーナリズムを賑わしたことがあった。歌人川田順と大学教授夫人との恋愛事件だった。また斎藤茂吉と永井ふさ子の『愛の手紙によって』は、大歌人と、父が子規の幼な友達だった美貌の愛弟子との、文字通りの愛の手紙を一冊に収めた本。

しかし作者の「老いらく」は「衝動買ひ」に走り込み、読者をはぐらかす。そこにこの句の面白さがある。さらに「秋闌くる」まで読むと、読者の気持も一句に得心する。

この句の前に、〈秋寒や白木造りの試歩の杖〉がある。「衝動買ひ」は、無事退院しての喜びから来ているのだ。俳詣ごころを具えた句である。

独り居の刻ゆつたりと帰り花

北岸 邸子

起き伏しの一端が伺える。「独り居の刻ゆつたりと」がいい。そこには姿勢を正した年配の女性の姿が浮かぶ。それはまた作者の他の句についても言えよう。

〈道問はれ道連れとなる小春かな〉の句についても、何でもない出合いを内容のある句に仕立てている。姿勢を正した表現の句だ。

アカペラの黒人霊歌冬の月

棗 怜子

「ア・カペラ」はイタリア語で「礼拝堂風」の意。広義には伴奏を伴わない合唱の様式という。

そのアカペラを唱しているのはアメリカ黒人。歌はキリスト教的宗教歌、即ち黒人霊歌である。冬月の下、荘重な調べと面差しの黒人のひと群れが思い出される。言葉を良く選んだ句だ。

冬桜三井晩鐘の音澄めり

清水 美子

「三井」は「園城寺」。通称三井寺。三井の晩鐘は近江八景の一つとして良く知られている。この鐘は元来奈良時代様式の銅鐘だったという。三井寺と言えば、へ日くれたり三井寺下る春のひと」という暁台の句が浮かぶ。掲出の句。「冬桜」が名鐘とよく響き合う。訪れたことのない人にも、その鐘の音が聞えて来よう。

落葉踏む母子にありし言葉の間

都丸美陽子

この「母子」は母と娘だろう。二人して落葉の道を歩いている。しかし作者は落葉の道を歩く、のでなく、「落葉踏む」と表現する。道という形あるものの代りに、ひそやかな落葉を踏む音を表わしている。これで一句の背景は出来た。その母と子の交す言葉がある瞬間ふと止む。静けさが静寂に変わる。「言葉の間」に母子の思いが重なる。しかし言葉はなくとも母と子に思いは通う。よく練れた表現の句と言えよう。

薄木菟土産に買ふや漱石忌

木村みどり

「薄木菟」は世で作ったみみずくの玩具。東京雑司ヶ谷の鬼子母神境内で売られている。薄木菟にはまた魔除けの験もあるのか。作者はそれを夫君の病氣平癒のために買ったのだらう。漱石の墓所は雑司ヶ谷霊園にある。素朴な懐かしさを感じる句である。